

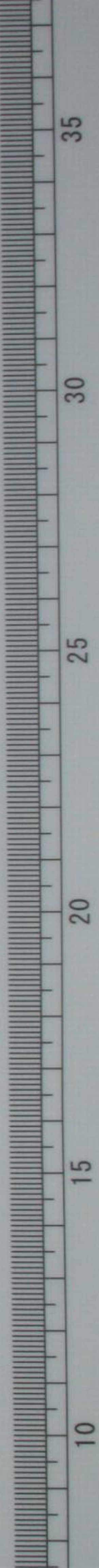
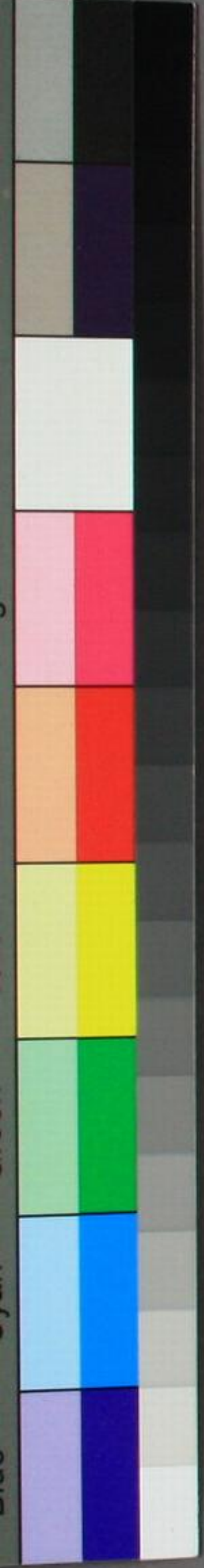
桃洞遺筆

第肇輯

卷下

113

884



413
884
413
884

琴彦



桃洞遺筆卷之三目錄

椿つばき 附山茶花さんてがはな

蓑衣虫みのいむし

附圓珠櫛えんじゆし

姥芽櫛うばめし

名護蘭なごらん

蛇足へびあし

附錄

瓊鹿じゆら

附鈴羊れいじやう

山羊さんじやう

北凡きたん

附月明凡げつめいん

野槌蛇のづらへい

附千歳蝮せんさいふ

水仙梅せんげい

治馬蜞噬人方ぢまぢしひにんほう

食巖虫しょくいんむし

青魚せいぎよ

附二親魚にしんぎよ

冬虫夏艸とうちゆうかしく

麀しゆ

桃洞遺筆卷之三目錄

大正五年二月

抄本遺筆卷之三

手蔓藻蔓

都鳥

桃洞遺筆卷之三

紀伊 小原八三郎源良直 録

椿きん 附山茶花

椿音丑 禹左 櫛說 文櫛 景字 皆同字なり和名玉たまツバキ

又キヤンチン又チヤンチンといふ本邦もとより多
きも此れれまども昔人識して唐山より種たねを取とりて
黄蘗山わうはくさんに栽うゑしやいふ木高たかく聳そびえ木理きり細膩こまかよりて白しろ

北同遺筆卷之三

實皮爾縱紋而樹梢枝と繁く分ち春新葉と生じ漆
 の葉は倍々長し雌木ハ五月長穂と咲く南天竹の花
 似たり白色なり秋に至り實熟しく形連翹小似る圓
 長自ら豎に裂く松實の如きも此風小從ひて飛ぶ本
 草綱目此莢形長く鳳眼小似る也鳳眼草といふ
 とあり山茶花を伊藤長胤の秉燭譚に曰椿ヲツバキ
 ト訓ズルハ本ヨリ誤レリ莊子ニ大椿ノコアレバ後
 世其花ヲ稱スルコトヲキカズ近年平井徳建氏ナド本
 草ヲ檢テ云山茶花ト云モノ即日本ノツバキ也ト其

後物産ノ説詳ニ山茶花タルコト愈明ナリとあり是
 説ハ從ふべし山茶花ハ品類甚多し花史左編群芳譜
 秘傳花鏡等小詳なり本邦小椿をツバキト訓じ
 ハ其誤を來ること久し唐山小も知れり草木藥方雜
 記小日本山茶花其國名為椿不名以山茶也といひ其
 下は白者以白玉最白玉一種花大色白而香香如我里
 白百合花之香開放于二三月次則唐笠也白妙也在高
 根則又其次也至于白菊六角之類花朵小不取焉紅者
 以中為最花大而香加賀牡丹甚佳花色大紅如牡丹花

辦邊或有吐露白邊者次則太紅牡丹與渡守春日俱妙

雜色最佳者莫如有川其白上有紅色如雲朝露其色紅

有白點者亂拍子亦然有薄衣色如醉楊妃者有大江山

一本有三四色者有三國一本乃三色者有玉簾一本四

五色者尚有浦山開荒浪鳴戶關戶金水引皆為上種有

加平牡丹唐絲鏡山唐椿山海牡丹諸種皆其下者共有

五百種有一種天下奇開花朵色百樣其國內亦少不可

得者有一種名五寸といへり此下に植様接木の法も

又書紀天武天皇十三年三月癸未朔庚寅吉野

人宇閑直弓貢白海石榴と云、之後白ツバキと訓

をつけたり、和名鈔小云海石榴和名豆波木とあり、共

は大なる誤りなり、海石榴ハ朝鮮ザク口なり、

直接、或説小海石榴とツバキ小充るこそハ即山

茶花の一種花小なり、大さ海石榴花の如く蒂ハ

青く、筒辦をなぬめの紙俗小ワビスケと名く、

漢名海榴茶明の楊升菴文集海紅花といふ、此の海榴茶と海

石榴と、遂に混と誤り出るなりといふ、志るるべ

又藝花譜の茶梅花ハ、サバンクワなり、これと誤

梨多ツバキと充る説も有り

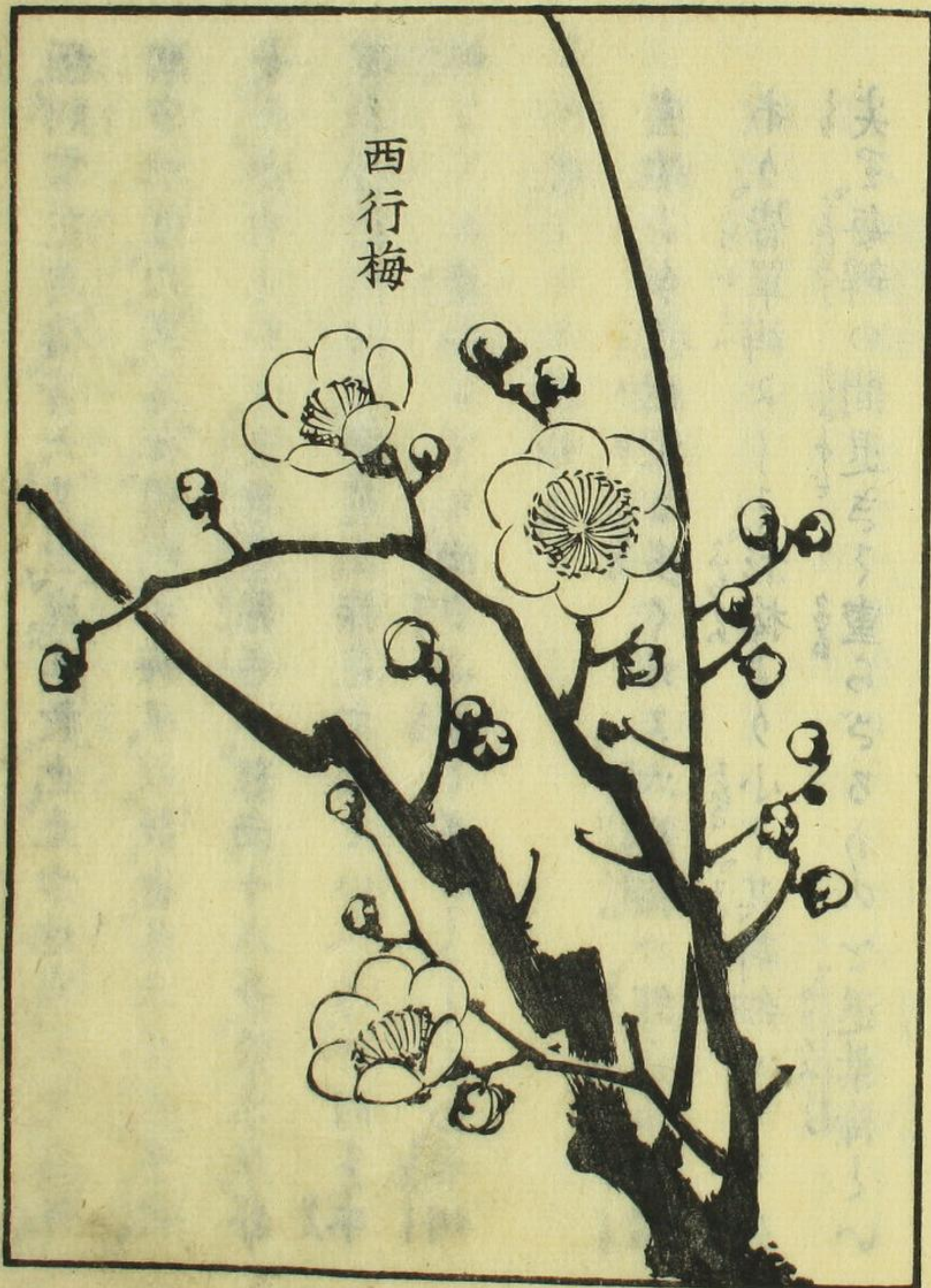
水仙梅

水仙梅ハ單瓣白色小一形最大なり六瓣なりとも
 六瓣梅ともいふ其香尤勝なり俗小其花六瓣也
 水仙梅と名くと水仙花單葉の者ハ六瓣也本草
 其香水仙花に似る也名くと直接小此説非なり
 或ハ花純白小く後微淡紅と帶る也小醉仙
 梅と名くといへり按廣東新語の説によれば水先
 梅と書も可なり其文曰瓊之州比年梅花六出

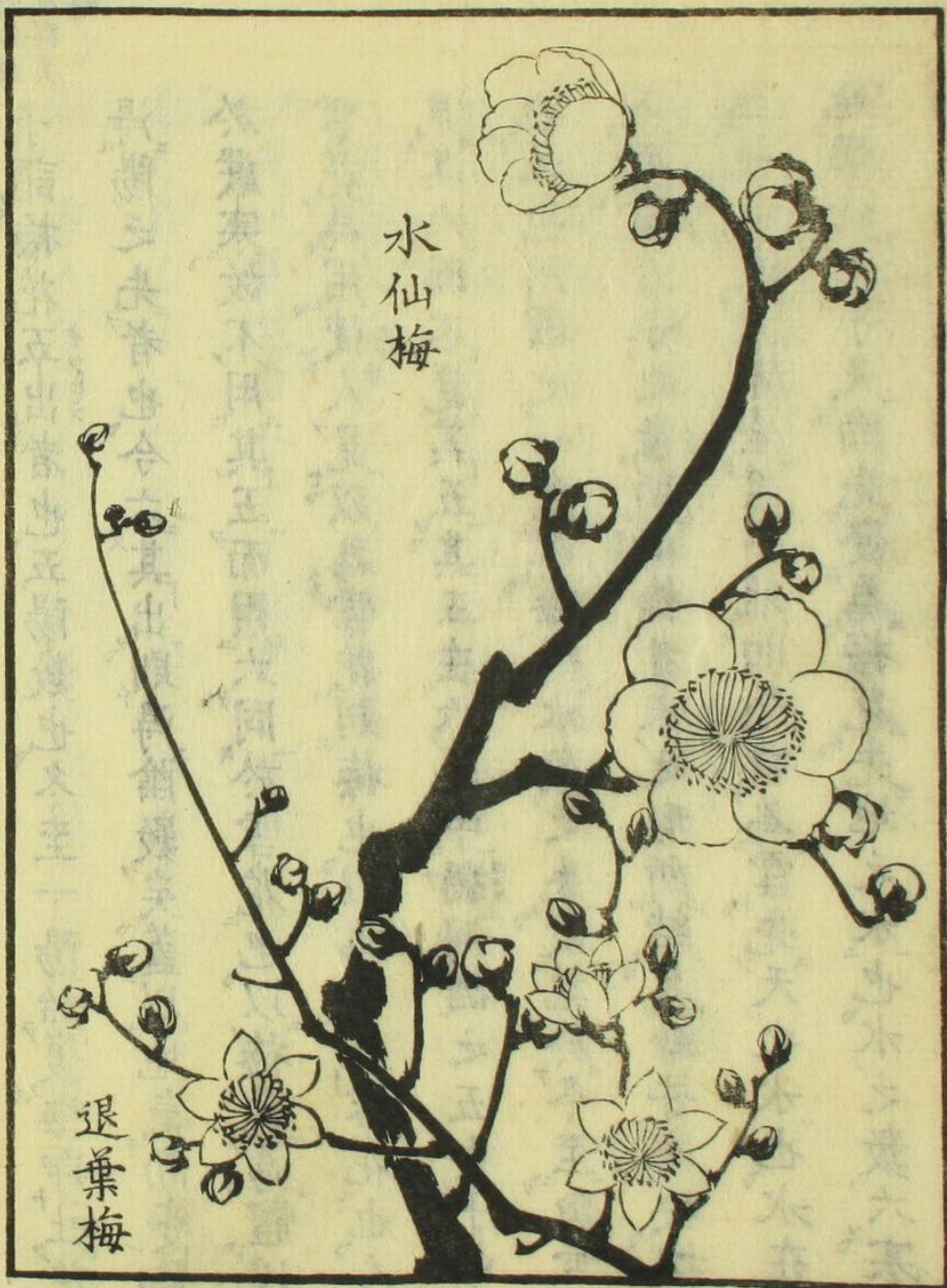
出字音 綴見于

丹鉛錄 及群芳譜

予謂梅花五出者也五陽數也冬至一陽始復梅即吐花
 得陽之先者也今六其出則得陰數矣蓋以地氣而變苦
 於嚴寒故不用其五而用六同於雪花也以梅花為體以
 雪花為用使人見以為雪花則梅也以為梅則雪花也人
 見其六而不見其五其五在六之中猶河圖之五在十中
 也且也河圖之一生水梅得水氣之先故花於冬至與雪
 同時雪者水之氣所凝梅者水之形所結其卦皆為坎坎
 為水水在天而未至乎地而先凝為雪先天之水也水在
 地而未上乎天而先發為梅花先地之水也水之數六寒



西行梅



水仙梅

退葉梅

極則雪花與梅皆六其出應其數也北方地寒以煖為祥南方地煖以寒為祥瓊州之梅早以煖也其六出以寒也
 是乃祥也と有り又孝豊縣志小鄣南十八景張九皋鄣
 笑尋梅詩の注尔鄣笑山梅花六出といへりいげ本
 邦まで唐山まで南方小多く産するところ也本州
 への處はこれ有り

直接は今種樹家は多く有る六瓣梅は紅白の二種
 あり皆單瓣より形梅より小く其瓣細く先
 尖り每瓣の間退き重らざるの退葉梅とい

ひ。又軒端梅といふは千葉より形は小く四
 外のを那びら赤く内は白く紅点有り
 其瓣圓く先尖らば瓣重るりの西行梅といふ
 て別有りこれ二種ハ稀は五瓣七瓣のをれも雜で
 開く真の六瓣梅は有り

蓑衣蟲

清少納言枕の草紙といえくみねむいせあそん
 かりかふれうけきばおやよにそこれもおそろ
 き心ちぞろんそまおやのあし衣ひきせ
 本抄本形ど小のやき衣今秋風ふりんおそそ
 といきせ小つくまり

んをるまぐととをひそにげていゝたるも〜風
 此おとき〜ちり〜八月をりり〜形をバ〜と
 たり形げ小なり〜いみどくありたり又夫木鈔此故
 事よめる寂蓮の歌あり契て々人親の〜
 秋うであれむみのむ〜
 猶數多あり又宗碩の藻塩草も
 あり〜
 按〜蓑蟲二種あり一種ハ初木葉の芽
 出し〜つ死食ひ葉の筋と残り口より絲と吐き身と
 中に綴り絡ふ此の如く〜多く重祢巢をつく内虫
 成長〜大さ一寸をか里木の枝に附〜下り垂る後

羽化〜蝶とわる。此種真物なり。一種ハ形相似〜木
 の枝に〜つら地を〜真物ハ一方より頭と出〜こ
 終り首尾より出歩と同類別種なり〜蓑蟲ハ唐山
 には諸名有り。晋の崔豹が古今注に曰結草蟲一名結
 葦好於草末折屈草葉以為巢窟處〜有之。宋の馬縞が
 同文に曰宋蘇軾が物類相感志小曰芝蔴柴掛樹上無蓑
 衣蟲。採蘭雜誌に曰結草蟲一名木螺一名蓑衣丈人。
 以上〜形同物なり

直接〜蓑蟲ハ枕草紙より古く宇津保物語より

梅の花笠の巻云。上略。ち宮に給ひて。みのむ
川は夕花をらぬ給ひて。そをぐり多にうさだせ
たるまれども。かくうきは多し。うくれ
さる。みるされ山の。これむ。ハ。花のぬるをや。帰る
といふらん。とあり

治馬蜷人

清の韓則愈。雁山雜記云。雁山春夏多馬蜷。毒物善
齒人流血不止。以燒竹葉塗創。血立止。今淡竹葉と燒
て試るに極効あり。馬蜷一名馬蛭。蛭字。證類本草
音質。事物紺珠

音只。廣韻音壘。和名ウマビル。古名又クマビル。今名。いふ。梅天
多く出る。大なるハ三四寸許もあり

姥芽楮 附圓珠楮

夫木和歌。鈔。為家卿の歌。冬くれ霜といふ。く
うむ。わ。此木。お。いの。すが。た。や。い。い。み。お。らん。い。ふ
是。ち。り。又。略。く。バ。メ。カ。シ。も。バ。メ。と。い。ふ。人。家。庭
際。多。く。植。る。熊。野。山。中。ハ。自。生。多。し。大。形。る。り。の。高
さ。數。丈。至。る。き。り。薪。と。上。品。なり。九。州。と。ウ。バ
シ。バ。と。い。ふ。楮。の。屬。小。く。葉。厚。く。長。さ。一。寸。許。楮。と

直云予友曾志致
患竹窓雨話初
編み杖荒本草の
石岡椽をひきと
ウバノは充りま
うべ

鋸齒あり對生凡冬凋まば花ハ馬酔木の如く又楮
の花小似黄穂を取後小楮の如き實と結ぶ小兒
採て火小煨し食ふ漢名詳り取らば圓葉楮の名
まども漢名より文政辛巳の春正月熊野浦へ江
南の蘇州府崇明縣の商舶漂流來其舶中の王壽
珍といへるも此樹を尋りに刺楸と答へり
直云先年或人予に語て圓珠楮といふも此ハメ
楮とよく的當に圓葉楮ハ圓珠楮の誤るべきり
されど其出書と忘さくりといへり按明の何孟

春ト餘冬序録の外篇に圓珠楮との凡其文に楮樹
歳結子其子小者小於榛味如之大者大如榛而味苦
土人取為果實謂小實者為圓珠楮大者為苦珠楮以
此今二種其材固無異也といへりこれハ楮の小實
し食ふべきものなりハメ楮ハ充らば尚後
考とまり

食巖蟲

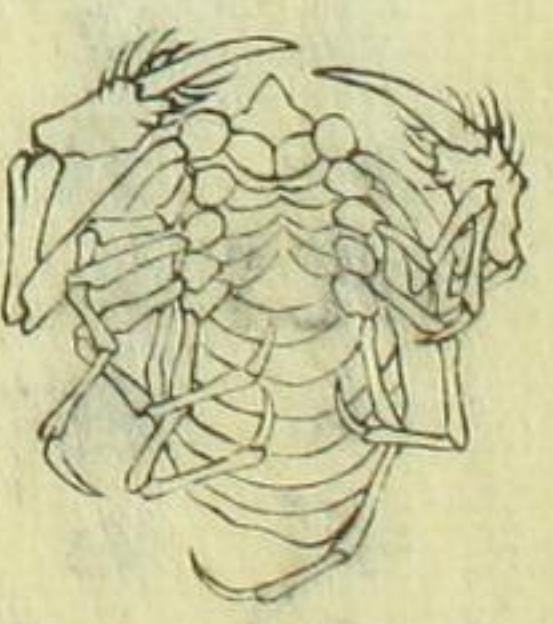
本州熊野浦神浦海邊石上ニ巢をつく土人石喰虫
といふ形白膜子衣の如し小なり其中ニ大さ二

食巖蟲

表



裏



土人... 食巖蟲... 表... 裏... (Faint background text)

分許の蟲あり形圓扁に... 八足前螯長... 全身淡巖色なり土人の説に此蟲たゞ此石をのみ喰ふといふ其石を軟く... 巖色なり石面小蟲の喰跡も見る全く波濤よき蟲蝕の形をなほ... 予此石を鉄來てく彼虫を入を畜ふるに日久くして尚活動は顯微鏡を用ひて此蟲を寫出るとその右に圖とるが如し漢名いまぶ考へば

名護蘭

琉球より來る名護嶽に産するものなり名く今花戸

多し、生樹の枝幹へ着、棕鬚の毛をどろり結つけ置
べ、皮へ根を纏ひ、蒸るものなり、又杪櫛へ着、能生だ。
苗の高さ七八寸、茎棒蘭に似、巨く葉ハ藤撫子の葉
小侶、長く滑なり、五六月一幹と抽、梢小花を開く。
七八朶攢生、形風蘭の花に侶り、其色蒼白なり、清
の徐葆光が中山傳信録に、名護嶽山上有萬松院、出蘭
葉如桂、抽箭如蕙、攢花如蘭、香更烈、稱名護蘭といふ是
なり、古説に、天台山方外志の長生草、一名仙人指甲蘭
を以て名護蘭と充る、一穂如く、一種花姑、大葉の

名護蘭といふもれあり、花葉ともに常品より大なり。

按、小琉島畧記に、壽蘭葉名護蘭ノ如ニメ、大ク幹長ク。

花モ名護蘭ヨリハ、莖長ク咲キ、香高シといふと、同物

形るぞ

直云、山岡恭安の本草正、偽に名護蘭出雲州多ク
産スといふ、其實否とあ、次

青魚 附二親魚

本草綱目、青魚、邵武府志曰、頌曰、生江湖間、南方多有。

北地時或有之、取無時、似鮫而背正青色、明の麝露が赤
稚、曰、色青黒、大

者百餘斤。南人多以作鮓。古人所謂五候鮓。即此。五候鮓ハ、漢京雜記。其頭中枕骨。蒸令氣通。曝乾。狀如琥珀。荆楚人煮拍作酒器。梳篦甚佳。舊注言可代琥珀者。非也。とあり。此魚何物。詳なれば。本邦小魚。サバのことを青魚。或ハ鮓と書と。故ハ和名鈔。鮓音青。和名阿乎佐波といひ。本草和名。鮓組。經反。和名佐波といふ。俱ハ非。る。サバハ。譯傳雜字簿。青花魚とあり。直云。サバハ。扁。サバあり。予。南海魚譜。著。青魚同名あり。朝鮮。ハ。ハ。詳。カドを青魚といふ。故ハ。東鑿寶鑑。青魚と載。頌。此

説を引き。其下ハ。非。我國之青魚也。といへり。カドハ。常陸國誌。河海交処。多出。といひ。採藥使記。此魚アツマル。所沫ヲ吹テ水面ニ浮ム。雪ノ降タルガ如シ。網ヲ以テ是ヲ捕ル。と松井玄蕃。いへり。本草啓蒙。云。カドハ。一名ニシシ。高麗イワシ。筑。セガイ。朝。房。總。常。輿。羽。州。殊。ニ。南。部。津。輕。蝦。夷。ニ。多。シ。九。十。月。ヨリ。春。二。三。月。ニ。至。マ。テ。採。ル。春。採。者。ヲ。良。ト。ス。冬。採。者。ハ。油。ナ。シ。大。ナル。者。ハ。一。二。尺。形。鰻。魚。ニ。似。テ。扁。ク。又。青。花。魚。ニ。似。テ。眼。大。ニ。メ。赤。ク。夜。光。ア。リ。鱗。薄。軟。ニ。メ。落。易。シ。捕。レ。バ。速。ニ。自。

ラ脱ス色青シテ光アリ肉ハ脆ク美ニメ紅色ヲ帶ズ
細刺多クメ鯧魚ノ如シ炙リ食メ味鯧魚ニ勝レリ或
ハ鮓ト為或ハ糟藏ス南部方言ニカドノ背肉ノ乾
タルヲニシント云全ク開テ乾タルヲハニシト云味
美ナリ津輕ニテハ生者ヲニシント云冬ニシシ春ニ
シシノ名アリ脊肉ノ乾タルヲ磨ニシント云全ク
乾タル者ハ京都ニ来ラス脊肉ノ乾タル者ハ多ク来
ル賤民ノ食トシ又猫ノ食トス其子ヲカズノ子ト云
一胞細卵數ナシ風乾メ四方ニ出ス新きもの黄白色
上品ト云陳きも

の紅黒紫色用ヒテ歳首及ビ嫁娶ノ祝具トス子孫繁
栄ノ義ニトル又カドノコノ轉語也凡云フ數胞ヲ合
テ形ヲ正方ニコシラヘタルヲヨセト云ヒ又ヨセカ
ズノコト云形扁長ニコシラヘタルヲノシカツノコ
ト云フ又生子を塩藏ヨリヨリヨリヨリヨリヨリヨリ
美者東海之鮓ト云ハカズノコナルベシトあり按ニ
昔ヨリ鯧魚ト書カズノコトト鯧或ハ鯧ノ字をカ
ドニ用也鮓ノ字ハ字書ヨリえバ鯧ハ集韻ヨ音東侶
鯧鯧ハ音煉侶鯧トありヨリヨリヨリヨリヨリヨリヨリ
詳リヨリヨリヨリヨリヨリヨリヨリヨリヨリヨリヨリ

よりカドニ充るや知べう

直接ニ新井白石の蝦夷志の注小加登俗用鍊字所

出未詳といへり採藥使記ハカド和俗鍊ノ字ヲ

用ユ東海ニ出ルヲ以テナルベシと後藤黎春いへ

り

蛇足

畫蛇着足の諺昔より是ありされど明の張鼎思ガ瑯

琊代醉編ニ曲江老兵捕一蛇焼之四足垂出如雞足形

以此知古人有未盡窮之事といへり予此説と信ぜざ

了に先年熊野新宮桃泉寺山の麓より一蛇長さ四

尺許の者猫と闘ふ山人こそ所殺と四脚あり形圖

の如く長さ二寸許指ハなく未

銀針のごとさ四五分許のり

數十縦横ニ生じ太地浦の

太地氏一脚と藏せしと其後

本府の杉山氏乞求り今ニ藏せりこまに張氏の

説妄なりざること又薩州ニヤマダヘビとい

ふそのあり腹より下ニ二足あり物と闘ふとき必



出たと聞き、其實否とあり、又本草、陶弘景の曰、

燒地令熱以酒沃之置蛇于上則足見○或ハ西陽雜俎

曰、蛇以桑柴燒之則見足出などの説あり、まご試

とび

直云、文政紀元の五月、本府の昌平河岸より一蛇を

殺、長さ五尺許、常蛇と異なることなり、只腹下の

左右鱗腫たる所あり、ろ、と裂バ二足あり、長さ

二寸五分許、形巖脚の如し、桃泉寺山より獲たる四

足ありと異なる、薩州のヤマダヘビといふものく

類なるべし、其後蛇の足あるものより、全く常蛇

とハ別種なるべし

冬蟲夏草

又夏草冬蟲ともいふ、舶來の者ハ長さ一寸餘、巨き筆

管の如く、色蒼黒、小く、其の方微く、黄色を帯ぶる乾

久く、ちるもの、恰も柴胡の形の如し、廣川氏の長崎

聞見録、小清高ハ腎藥なりと、大小珍とすることと

いへ、此品唐山より古ハ、かき者、や、康熙己前の

書に載る、と、呉儀洛が本艸從新に曰、冬蟲夏草、甘

平保肺益腎止血化痰已勞嗽 袁棟が書隱叢說尔曰

夏草冬蟲浸酒服之可以却病延年 徐崑が柳崖外編

二曰冬虫夏草和鴨肉頓食之大補 七十一が西域聞

見録一曰夏草冬虫入藥極熱 魯華祝が衛藏圖識

曰冬虫夏草性温暖補精益髓 唐秉鈞が文房肆攻圖

說小曰夏草冬虫保肺氣實膝理功用不下人參 書の上六

文ハ近年多紀氏が著と暨 按小冬虫夏草ハ本邦所

所産を陽地ハ絶くなく 江州より臭梧桐の根

を生じ或ハ地上或ハ土中二三寸ありといふ其

形種々あり近年抽水常盤といふ人觀音寺邊山中

く探り出るとその皆其苗口中より出る 舶来頭上より

苗出ると異なる 形狀下は圖とるが如し 又熊野より

ハ桑針の本より生じ長さ二三寸細き筆管のごとく茶

褐色のごとく能蠕動口中より絲のごとく記者叢生

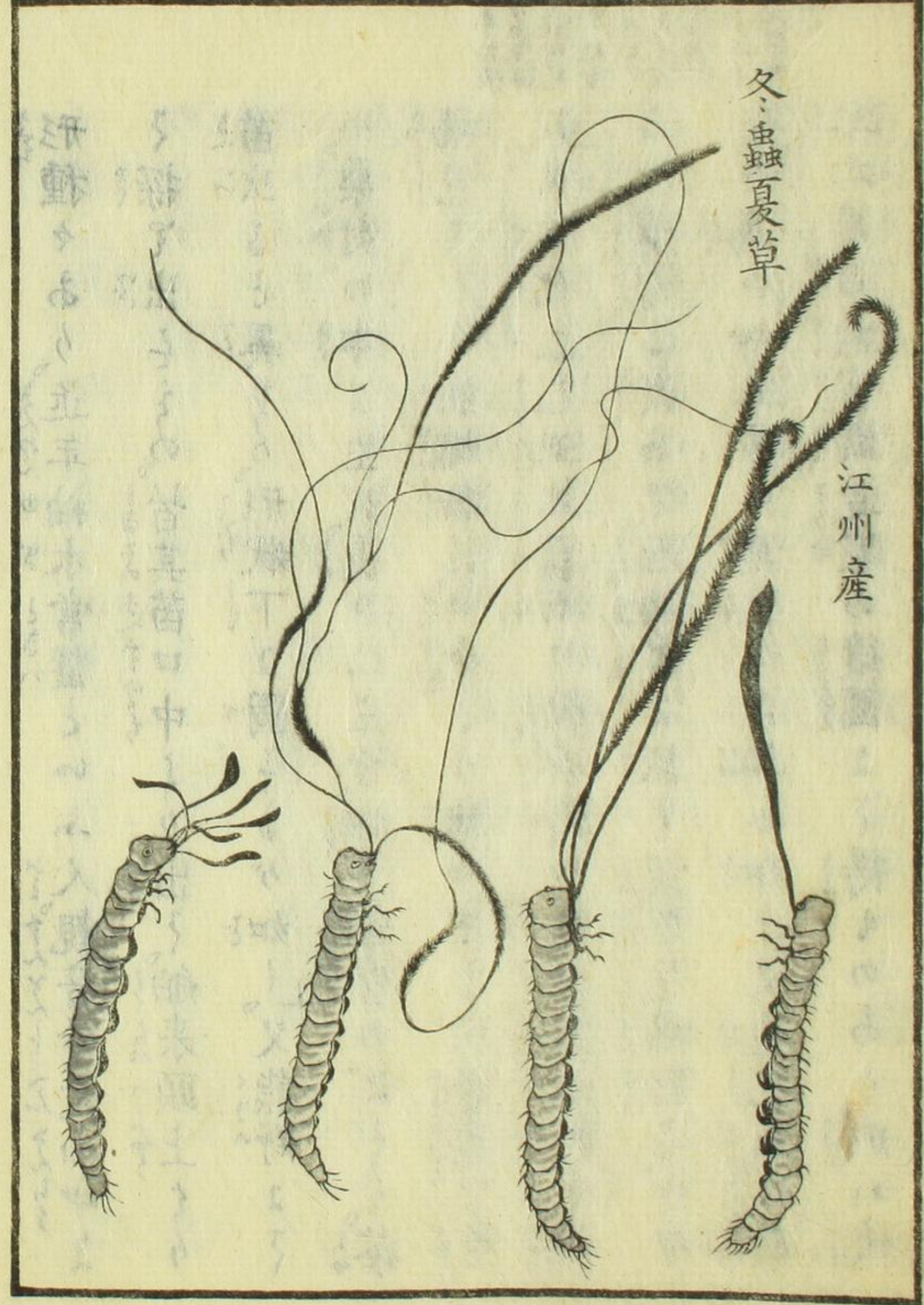
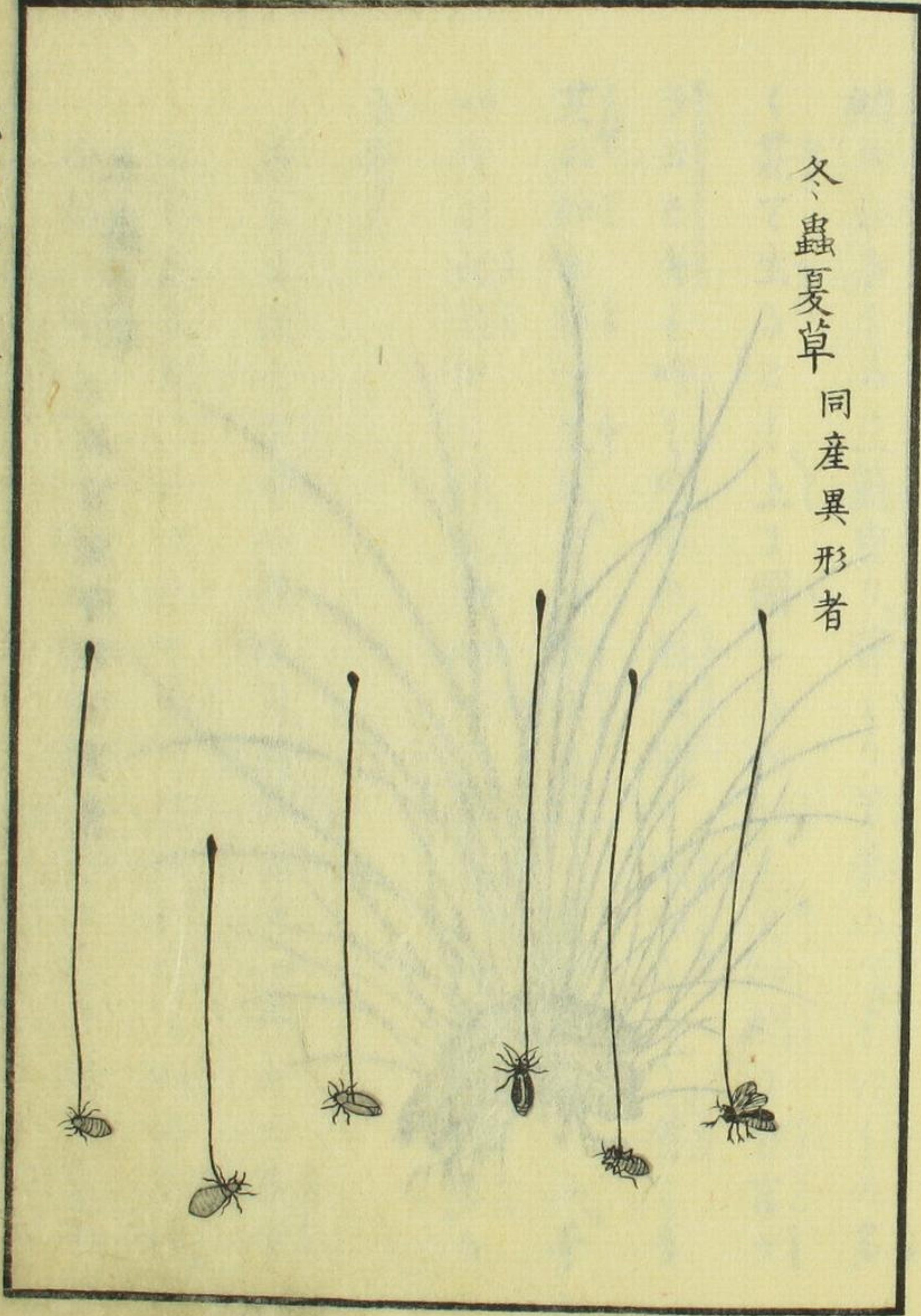
又文化二乙丑年雷雨の後本府の東北出水村と過

るに溝邊より出たり 形油虫に似る淡黒色蠕動と口中

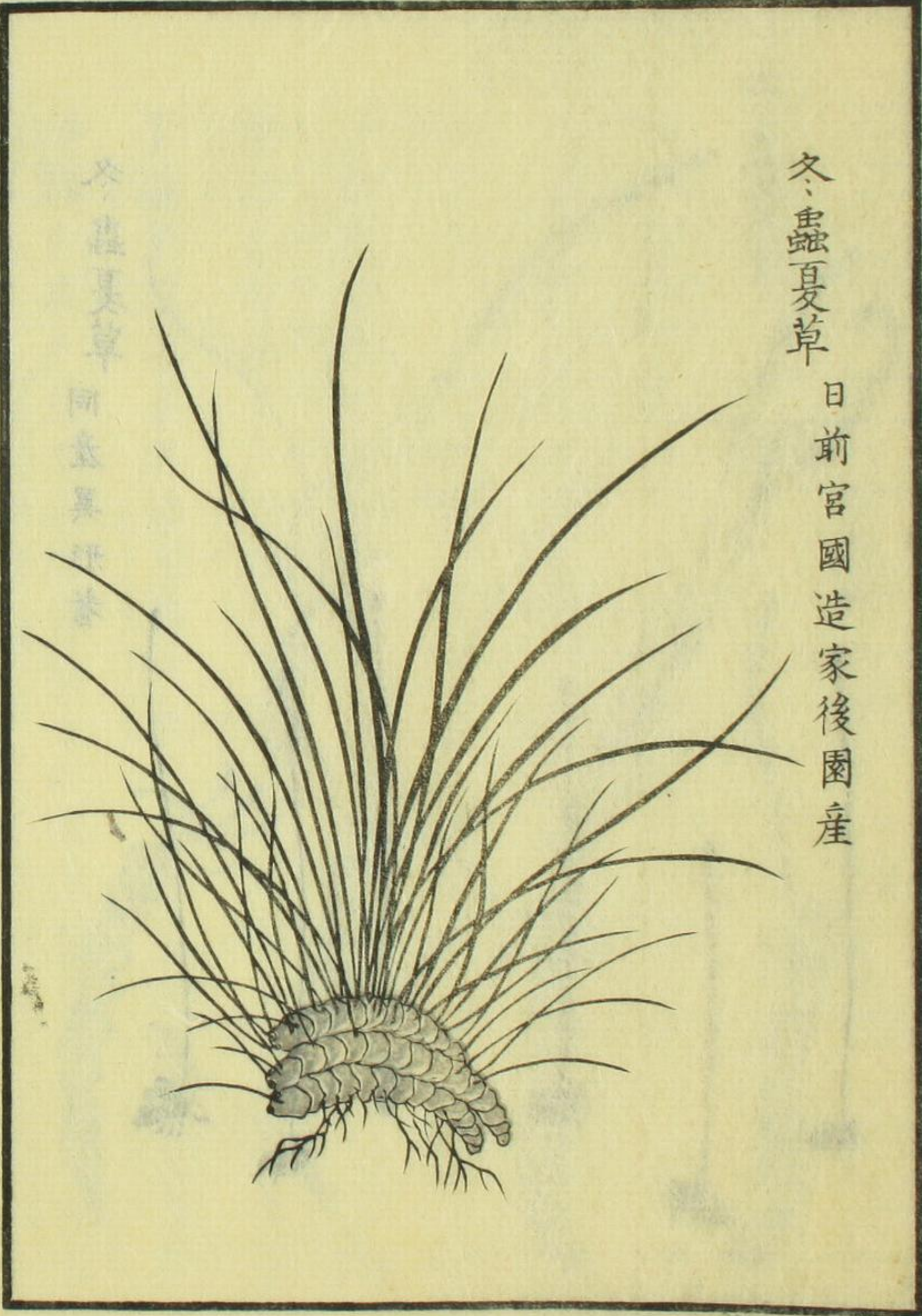
より高さ四五寸の葉出る白茅の如し 又文化五戊辰

年六月日前官國造家の後園より得ものあり 形ハ伏

直接二粵西偶 記ハ粵西沈融 谷偶歩城頭見 地上一葉蠕動 而行取視之半 已成虫其半猶 葉也蓋濕熱所 化耳といふも 冬虫夏草の属 なるべし



冬、蟲夏草 日前宮國造家後園産



蜻とらの如ごときものの三さん箇こ重じやうり背せけり茅ちやう葉はつのごごととりの多おほ
 くあま荒しやんで生なること上うへに圖づとるが如ごとく又また加か州しやうに方はう言げんケ
 ラヨモギと呼よむのあり形かたち土つち駒こまと同おな形かたちに首くびより
 艾あゐの如ごとき草くさと生なじこれ冬ふゆ蟲むし夏なつ草くさの屬しゆなりといふ予
 いまぞ此この品ひんをいふ此この餘あま諸しよ州しゆを探たん索さくせば尚なほ種しゆ類るい多おほく
 あり

直ちよく云い文ぶん政せい七しち甲が申しんの秋あき八はち月げつ筑ちく前ぜん福ふく岡おか伊い丹たん氏しの庭てい中ちゆう
 に冬ふゆ蟲むし夏なつ草くさ二に三さん十じゆ本ほんも聚あはり生なじ形かたち宛あやも蟬せみの如ごとく
 全ぜん株くさの根ねをちり形かたち水みづ松まつの如ごとき高たかさ三さん寸すん許この草くさと

頭上（頭の）に悉（し）く生（し）じりと聞（き）る。予按（よ）る疑（ぎ）らくハこれ冬（ふゆ）
 蟲夏草（むしげ）より生（し）じ。和名セミタケ（わ）。又セミノキ（わ）江（え）と呼（よ）ぶ
 ものいゝ即ち本草（ほんそう）に載（の）る蟬花（せみはな）一名冠蟬（かんせみ）宋（そう）の宋祁（そうき）
 が益部方物記（えきぶほうぶつぎ）に蟬花（せみはな）之不（し）蛻（た）者（しや）至秋（しゆ）則（すな）花其頭長（はな）
 一二寸。黄碧色。治小兒瘰癧（れいれい）又能（よ）己瘰（れい）といふもの是（これ）
 ちるべー

桃洞遺筆卷之三終

附録

小原良直 著

羶鹿

附 麋羊 山羊

羶鹿ハ古名カマシ、書紀ル。

皇極天皇二年冬

十月の童謡（わがうた）に伊波能（い）杯（は）爾（に）古佐（こ）屢（ろ）渠（け）梅（め）野（の）俱（ぐ）渠（け）梅（め）多（た）你（に）

母多（も）礎（そ）底（て）騰（た）衰（せ）囉（ら）栖（せ）歌（か）麻（ま）之（の）二（に）能（の）鳥（う）臍（し）といふ是（これ）ちり一（ひと）

名ニク、又クラシ、信州カマシカ（しんしゅう）本朝（ほんてう）シマジカ（しん）薬（やく）カモ（か）

シカ（し）俗（ぞく）アラシ（あ）、南（なん）カベトリ（か）飛（と）州（しゅう）カベ（か）上（じやう）ちどの名あり。

谷川士清（たにがわし）の書紀通證（しよき）ル加毛（か）之（の）謂（い）羶鹿也（しやうろく）羶（しやう）の古名（こ）と

桃洞遺筆附録

い 與冬瓜云加毛宇利義同又云爾久以此皮為褥也和
ふ 名鈔褥此間途久毛席名也といへて此獸全身黒色或
ハ褐色或ハ黒褐色少々白斑ある者あり羊の大
角並び生ト長さ五寸許色黒く内空一本は横
皺多くありて外ル節あり足下は岩スイ蕉といふも
のあり能壁立の處に登るといふ和名鈔爾麤羊和
名加萬之といふ延喜式ル羚羊角とカマシノツ
ノと訓ト本草和名ニ零羊角和名加末之乃都乃
の鑿心方ル加末之之乃都乃小はくるとあり故ル今ニ至ル藥店ニカマ
丹波 康頼

シ、の角と和産の羚羊角と名けらる皆誤りなり種
鹿ハ漢名詳々麤羊羚羊零羊ハ一物と和産
角ハ舶来なり形牛角の如く徑寸餘長さ尺許直
末微し尖り白色と黄色と帶る節ハ多く
竹筍の皮と去るが如く末二寸許ハ節あり外
透明内ニ巨き心あり木の如し本草綱目ニ雷敷ガ
曰凡用有神羊角甚長有二十四節内ニ天生木胎此角
有神力明の倪朱謨ガ本草彙言ニ曰羚羊角白亮如
玉長七八寸本草從新ル曰羚羊角明亮而尖不黒者

良之麋等の文より、麋鹿の羚羊より、
 を知べし。麋鹿ハ、夜角と木石小掛る、
 羚羊懸角木上以遠害といふ、
 羊と然れども角の大小形色皆異なり、
 決る麋鹿より、又書紀より、
 背王之頭髮斑雜毛似山羊とあり、
 此山羊カマシ、
 訓をつけたり、これ亦麋鹿らば、
 山羊といふ、郷藥本草尔出る、
 本草綱目の山羊ハ、和産
 於詳々本草啓蒙ニ載る、
 畧に充麋鹿ニ充

るべきもの小何、又君山の本草正偽、
 シ、尔充る大ニ非なり、
 往年 水戸黄門義公朝鮮産の麋を常陸山中ニ放
 さし、
 牙の如く口外ニ出る牝を牙、
 ハ三ノ分、
 鮮よりノ口といふ、
 上羚羊山羊麋の三物麋鹿ニ充らば、
 さや考べりらば、
 蘭山翁いへり、
 予按、清の張綱孫

が獸經小羚羊と載るの外は麋と載る以林而掛角とあり又康熙字典は麋音齊麋狼獸名似鹿而角向前入林則挂其角故常在淺草中逐入林則搏之とあり恐ハこれ種鹿なるべきや尚後考とす

北瓜 附月明瓜

近年讚州より一種の西瓜を出り白西瓜といふ形常の西瓜より皮薄く白色より瓢子ともに紅色なり味至る甘美より常品は勝る按は群芳譜西瓜の附録は北瓜形如西瓜而小皮色白甚薄瓢甚紅子亦如西

瓜而微小狹長味甚甘美與西瓜同時想亦西瓜別種也といふ即是なり又今世上は白西瓜と呼ぶのあり皮白色より瓢淡黄色なりこれを明の李中立が本草原始に載る月明瓜より北瓜と別なり

野槌蛇 附千歲蝮

嘗て聞く和州吉野山中本州熊野與等は産れ其形ハ長さ二尺餘頭尾均く尾尖ら槌の柄なきがごとく全身蝮蛇の如く口大く能人と噛む甚毒ありといふ古説ル千歲蝮は充きども本草綱目頌の

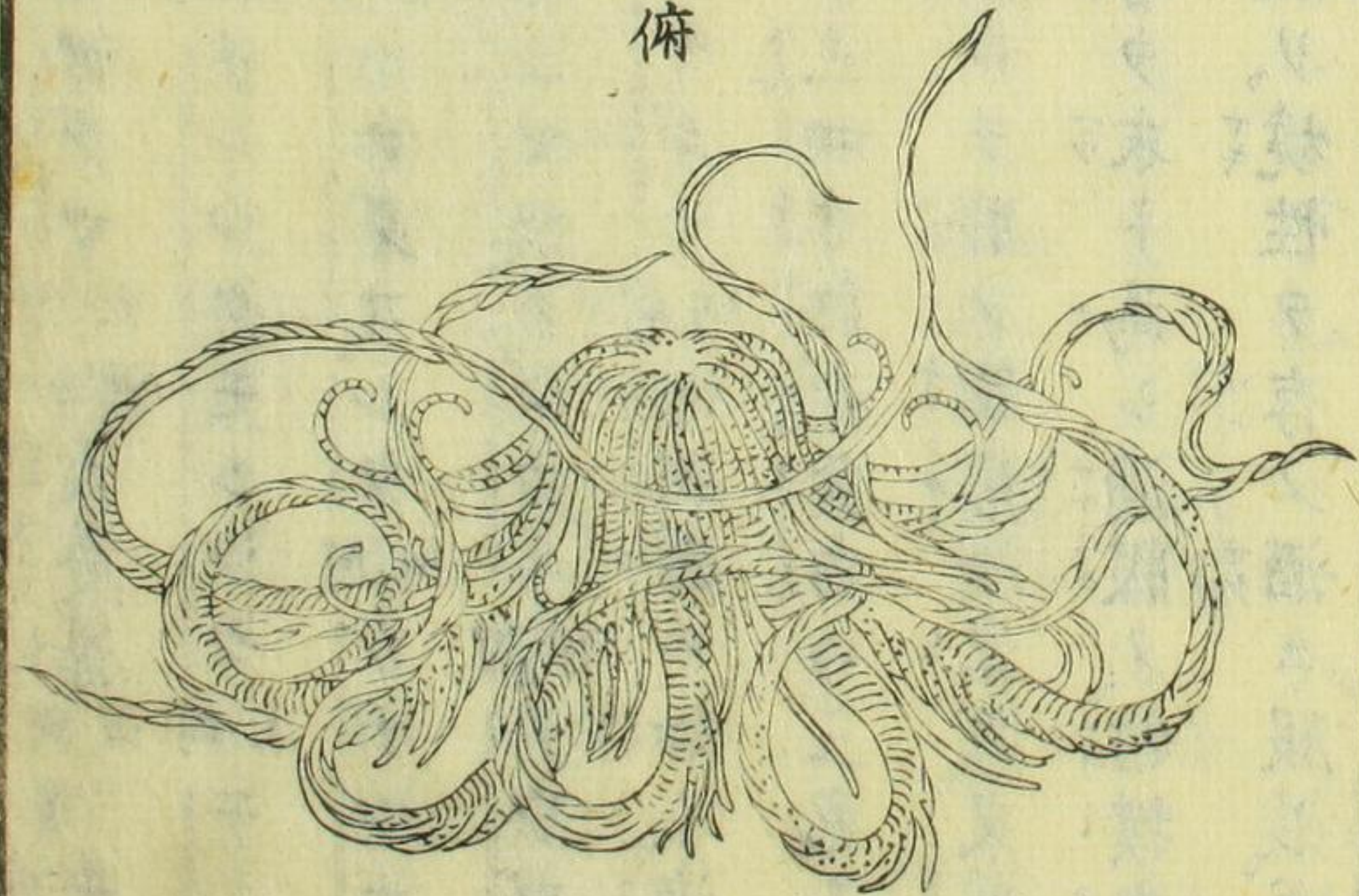
説^ト有^ル四脚といへを充ら^カ。按^テ嶺南雜記^ニ瓊州有^ル
 冬^ノ凡^ソ蛇大如柱而長止^ニ二尺餘其行跳躍逢^ル有^ル聲^ハ螫^ル人^ヲ
 立^テ死^スといふ。これ野^ノ槌^ノ蛇^{ナリ}なるべし。○一^ニ歳^ハ蝮^ハ詳^カら^ラ
 比^レ本草啓蒙^ニ信州戸隠山ハ高クメ雪深ク六月ニ氷^ヲ
 ザレバ登^ルべカラズト云^フ其神社ヨリ奥^ニ三十余抱^ノ
 ノ珍^シシキ大松アレ^ド。六月比^テハ山カバ^シト呼^ブ毒^ノ蛇^{ナリ}
 アリテ人ヲ害スルヲ畏^レテ登^リ見^ル人^ヲ稀^{ナリ}其蛇^ハ
 ハ四^ノ足^{アリ}テ石龍子ノ形ニ似^{タリ}人聲ヲ聞^ケバ後^ノ
 足^ノミニメ立^テ人ノ来^ルヲ待^ツ若^シ螫^ルレバ毒^ハ猛^ク

し^レ凡^ソ蝮^蛇ヨリハ輕^シト云^フ。此類ナルベシといへり

手蔓藻蔓

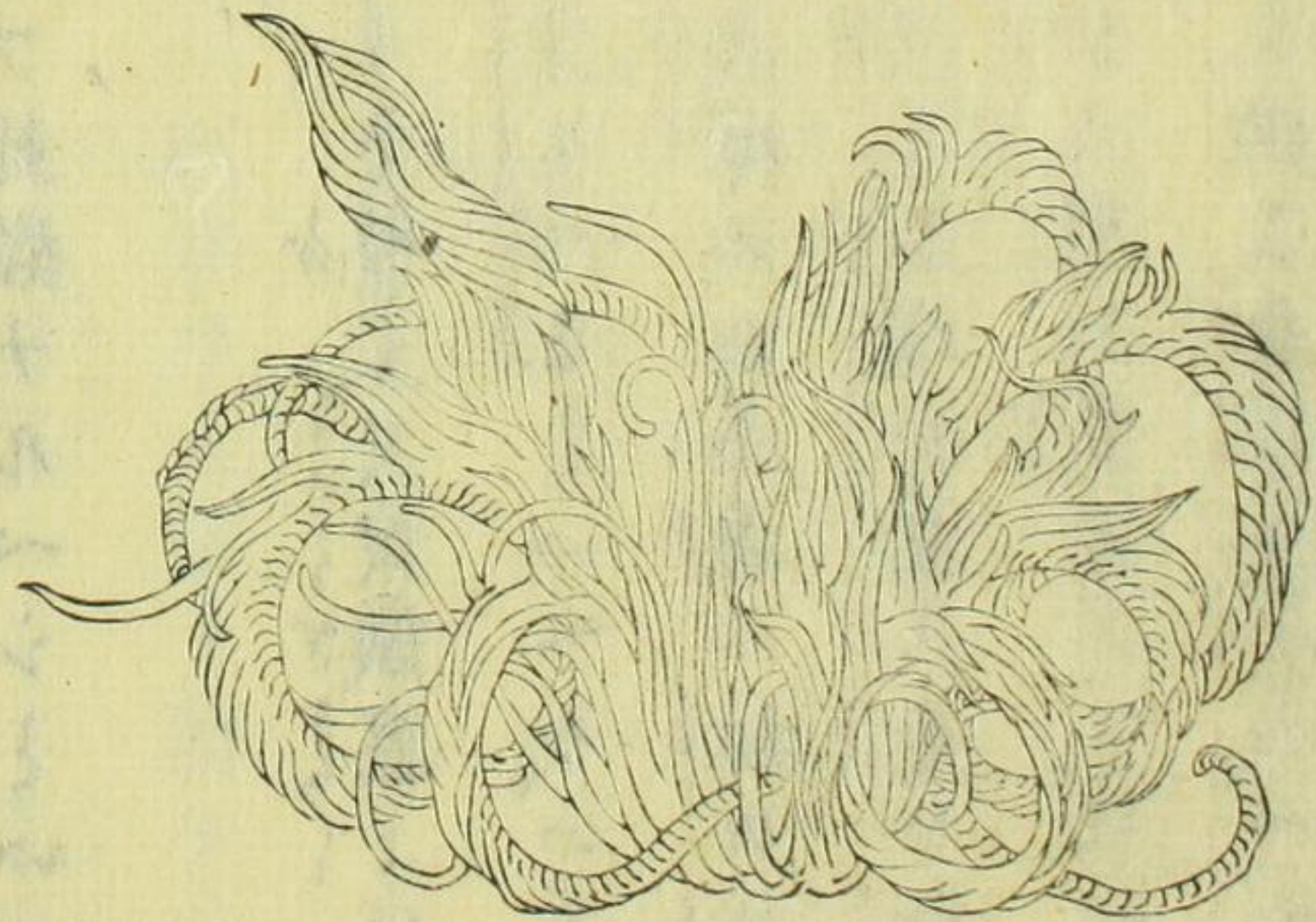
橘菴漫筆二編^ニ事多端^ク一^ニ繁^ク又衆議區^ニ一^ニ
 變^テ談^ハ一^ガさき時^ヲ手^ヲづももづるといへり。い^ハり^ハ形^ノ
 事^ニやと思^ヒ一^ニに攝州兵庫^ノ西高麗^ガ林^ノ沖^ノ
 海底^{ヨリ}手蔓藻^トいふ者出^ル近頃和蘭人^ニ是^ヲ知^ル
 求^メ歸^ル一^ノ藥能^クあり^キ世^ニ用^ヒ覺^エと^リこれ^ヲ
 採^ルハ九月^ノ時^トい^ハり。按^テ手蔓藻蔓^ハ一名海^ノ
 牡丹^シワヒト^テ本州^マツダコ^同上^テンズモンズ^同上^シ

俯



手蔓海藻

仰



ヤグマ 同日 北浦 シヤクシヤグマ 同 加太浦 天蔓藻 同 若山 手蔓

藻 州 撰 テンズモンヅル 同 上 テンツクモンツク 同 上 テンバ

同 上 テンハチ 豫州 ガラコ 同 上 ハナダコ、シウ 阿州 ツナツカミ

肥 前 ホ子ツギ 同 上 シヤクシヤラ、ノヅカミ 讚州 ノウヅカ

ミ、ナルカシラ 房州 バンシヤガヒ 尾州 形状圖の如く、海中

ニあり、能蠕動、大さ三四寸許、赤黄白の三色あり、

本草啓蒙、末ト為テ酒ニテ服メ胸痛ヲ治ス、又煎服

メ疝ヲ治ス、又生ナル者ヲ末ト為シ酒服メ、打撲瘀血

アル者ヲ治ス、又足ヲ取り、焼性ヲ存メ酒ニ服シ、或ハ

末トナシ、米飯ニ和シ傳ルモ可也といへり、又撰州大

阪、よく全く焼く霜とあし、こきを天鶴霜と名け售る、

痰咳と治するも妙也と云、これ本草原始の圖とす、所

の、海盤車の屬なるべし

都鳥

萬葉集、布奈藝保布、保利江乃可波乃美奈伎波爾伎

為都、奈久波美夜故杼里香蒙とくえあるとほ、わ

く、伊勢物語、をほゆさく、武藏の國とまもはふ

その國とれ中、いとおほきなる河あり、それとす

多河といふ。中志ろ記より此よりとありとありき。志
 記のおお記される水はさへうおそむついでいそく
 ふ。京尔ハ見えぬよりなれど、みな人見しは、
 をりにいふれば、これなん都鳥といふとき、名
 ういふ。いばこころん、みやこどり、わがおとふ
 人ハありやなうと。阿佛尼が十六夜日記尔尾
 張のくに鳴海の瀉と過るに。中志ろ多河のそりよ
 こそありと記し、かど都鳥といふ鳥のけしとあり
 と赤きハ此浦も有たり。ふと、はん、嘴と足とハ、何

うざりし、まのこむか。の、やこどりうも、此外古歌
 多一、大抵ハ藤原長清が夫木和歌鈔契冲が勢語臆断
 尔載きバあ、う畧と海も河も濱もよ、又色
 ハ志、はく、嘴と足とは赤きよ、いへるもの多し、予
 按、都鳥ハ諸説紛々、一、な、下學集尔、鷗日
 本所謂都鳥者歟といひ、臆断および季吟が伊勢物語
 拾穂抄真淵が伊勢物語古意千蔭が萬葉集略解あど
 小鷗とヒリ、本草啓蒙よも此説尔従ふ、近年高田
 與清十六夜日記残月鈔と著し、鳴と、此説千古

不易ふえぎの確論くわくろんなるべしといへり。鷓鴣ひんちん品類多し、本草啓蒙ほんそうきほうに詳くわふされば、あぐらうのセバ、都鳥みやとといふ野や必大ひつたが本ほん朝食ちうしき鑑かん小曰、京師歌客語予曰、伊勢物語都鳥者鷓鴣也、京客不知鷓鴣ひんちん鳥トリ據其形、閑麗かんれい以有美夜称、予未知其真偽鳥と、これあほき鳥の嘴くちばしと足あし赤あかくみやびある貌かたち也、るり、ミヤコ鳥といふと此説なり、残月鈔ざんげつしょうハ、本草啓蒙ほんそうきほう鷓鴣ひんちんを子コドリ前子コサギ後海子上コ総ハマ子武とよぶといへり、こ終鳴聲なげこゑの猫ねこ似にたるがゆゑ也、源氏げんじの若菜わがなの下したに猫ねこ糸いとううといとらうとげよふ

けむと有あ今いま打うきくくににニヤウにくとなくが如ごとく鷓鴣ひんちんもミヤくとなくさ色いろの、子ウこくともニヤウにくとも、ううといとさこそと、猫ねこのいろ色いろいと近ちかければ、某猫あるねこといふ名ともよびよなり、ささ都鳥みやとのミヤハ色いろよよりてねかせ、コドリとよぶことりことららごごとららななどの小鳥こどり同おなトく大鳥おほどり対むかへむか称ななりといへり、ミヤコドリみやこどりの義ぎ両説りやうせつとのににくくりりななりり猶なほ考かべべ、又都鳥みやとといへり、鷓鴣ひんちんと書かけ此字このひんちんと考かるに字書じしょより見え、勢語古意せいごこい鷓鴣ひんちんの字このひんちんの草書そうしょより誤あやまるものなりといへり、以上鷓鴣ひんちんと都鳥みやとと

る此也。古今著聞集、院御隨身右府生泰頼方々やこ
 どりどある殿上人、爾ゆひせある河成季尔あけけ
 られ侍り、くひ物などもあつて、よ海づの貴さくい
 せ侍も所せくおほえくゆいきわのりいなるによ
 りく、小田河美作茂平がりて、やりりりハせ侍り、
 のこと河載り、これハ何物とさくく都鳥と名るり
 詳さくび。○大和本草に或鴨ヲ以為都鳥未知是否今
 按西土ニテ都鳥ト称スル鳥アリ、昔ハ黒ク腹脇白ク、
 嘴ト足ト赤シ、嘴長シ、ケリノ形ニ似テ其形ウルハシ、

伊勢物語ニイヘル都鳥是ナルカといひ筑前續風土
 記、都鳥嘴足赤シ、白黒斑ニテ大サハ其形ケリニ似
 タリ、此鳥伊勢物語ニ載タル都鳥ニヤ決シガタシ、香
 推ノ瀉ニノミアリといふ、こきハ筑前の方言乃都鳥
 々々真物うハあし、本州へも稀ニ来る鳥々々、方言
 黒ドリといふ、水雞の一種ニ黒ドリあり、又土佐
 島良安の和漢三才圖會、鴨を出せる外、都鳥正字名
 義未詳、大如鷓鴣、白色、唯嘴與脚正赤、關東多有之、畿内
 未有之人亦不食之、有業平視都鳥於隅田川之語とい

へるハうけがぬ。都鳥ハ、これ鴨の屬なるを以て
 比し。伊勢物語う擾る。妄に書せり。のなるべし
 ○直海龍の廣大和本草。駿州ニテ土人呼テ都鳥ト
 云モノアリ。鳧鷹ノ屬也といへるハ何物り詳ならず。此書杜撰多クれば信ぜべく。○和訓栞後。都鳥ハ。一説ニ鴨の事也といへり。或ハ鶺鴒也といへり。とあり。此鶺鴒ニ充るハ大なる誤なり。○齋藤彦磨の勢語圖説抄。都鳥の歌代々の集にあまふれど皆水鳥とよめる也。そり中ニ宇津保物語。名うてあふ。關

越ト都鳥（こま）を百一きい。又六帖。絶づ。鳴もさる。都鳥。いづきのを。年々。わん。まび人の住ふるや。都鳥音づき。年ぞへ。水鳥との。いひ。思ふ。ミサゴ鳥。ハ。サトヤと相通。ふ音なり。和名。雉鳩。和名。美佐古。屬也。好在江邊。山中亦食魚者也。とおき。水邊の。山林。住り。又万葉集。佐夜。誤。に。あ。る。字體能似。予友加納諸平云。名。お

ふまゝに控られ此歌とてとく都鳥ハ海邊をうづも山中
 りると啼く證り引あるハ誤りなり此院の帝吹上の
 宮よりあへらぬゆゑなり吹上の海邊より彼鳥のな
 くとも多しとある哥の中なり關をも越すとよめる
 ハ白鳥の關の事なり委ハ宇津保に吹上下の卷と開
 くともべしとくや白鳥の關の哥なりとも彼あ
 り海邊より近ぐれを此鳥の行々ゆふことや中へむ
 りあへん今も山口の驛をどよとくくくさゆれり
 ふと一也又美佐古よりな〜んといへるも甚じきいぐ

事なり○本草正偽は本朝食鑑ニ鴨ヲ都鳥トス大ニ
 誤レリ鴨ハ大サ鳶ノ如ク灰白色ニメ觜足俱ニ黄ナ
 リ都鳥形小クメ鷓ノ如シ翅ハ白ク黒点アリ觜足共
 ニ紅ナリ尾州鳴海辺ノ海濱ニアリ都シギト云阿佛
 十六夜日記ニ鳴海ノ浦ニシテ都鳥ヲ見ル歌アリ是
 ニ合ヘリ武州ノ海辺ニモ有之野必大ハ東都ノ人ナ
 リ隅田川ノ都鳥ヲ辨ゼザルハ何グヤといへり此説
 是ニ似々反々非なり鴨ハ前々もいへるごとく品類
 多し江鴨などハ觜脚赤し鶯鴨などハ觜脚黄なり又

淡黒色のものあり、黄と限るべからば、又都シギハ勢
 州及び熊野海辺にもあり、濱シギともいふ、此鳥を以
 る都鳥と充るよりハ本州海辺所々よとて、方言紅カ
 モメといふものあり、春月の細鱗魚の子と追々紀の
 川上よのぼり、鴨と交り居る、鴨の屬ルル形鴨より
 小く、味脚共々朱色、全身白色小く、捕へしれを粉紅
 色のものあり、至々美なり、勢語の文と能合へり、按
 之清異録云、隋官者劉繼詮得芙蓉鴨二十四隻以獻、毛
 色如芙蓉といひ、清の周櫟園が閩小紀云、莆田九鯉湖

中、鴨作粉紅色、嬌艶異常、又明の謝肇淛が文海披とい
 へるも此屬なるべし、實はニヤコドリハ鴨の屬とて、
 中ドその居るものされを鴨といろく、説稗を
 ども、鴨ハ古くよりかきわといふ名あり、都鳥とは
 いそ、形状中々に紅カモメに似多き、これ都鳥
 なること疑なく、和歌者流秘事口傳をどこととて、
 いへた今詳に辨ぶる也。

桃洞遺筆附録終

桃源遺筆附錄

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]



桃源遺筆

小原桃源先生遺編

自二編至五編同 蘭峽先生輯錄

各三冊追刻 鹽路鶴堂先生畫圖

天保四年癸巳仲夏刻成

若山新通二丁目

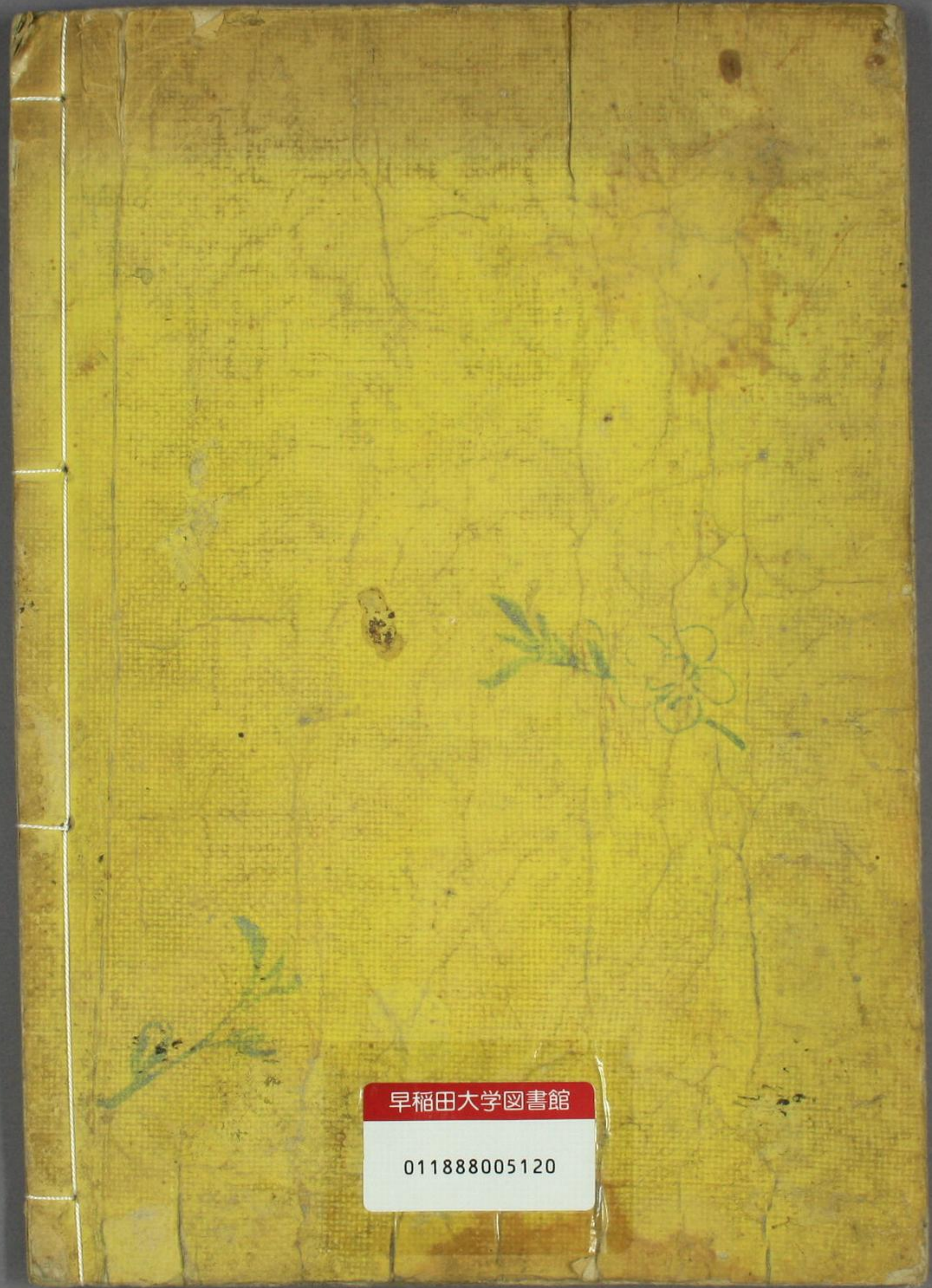
帶屋伊兵衛

發行書肆

全三丁目

總田屋平右門

全中之島
阪本屋喜一郎



早稲田大学図書館

011888005120